

# 『白衣の女』における都市空間と アイデンティティの修復

古 野 百 合

**Synopsis:** Wilkie Collins' *The Woman in White* has long been discussed with respect to unreliable narrator, subversive gender roles, and a blurred class system which reflects the rapidly changing society. However, more attention is to be paid on the reconstructive phases of the English country towns and people in the mid-nineteenth century in Britain. Indeed, the novel's motif of repairing a valuable collection of drawings by Hartright resonates with the vital plot of this novel: repairing characters' identities. Not only drawings, but also things such as wooden portraits of the twelve apostles, or even English country towns with the rise of industries in the Victorian era are in need of repairing. In a period of transition from rapid growth to maturity in the Victorian society, things and people that are lost and repaired are contrasted in this novel.

## 序 論

ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-1889) の『白衣の女』 (*The Woman in White*, 1860) は、センセーション小説というジャンルの再評価に伴い、1980年以降、急速に批評的関心を集めてきた。その中心は主人公ウォルター・ハートライトの語りの信憑性を問うものである。ハートライトはその語りの隠蔽性においてパーシヴァルやフォスコ以上に悪辣であると評され (Pamela Perkins and Mary Donaghy 1990, Ann Gaylin 2001)、逆玉の輿を狙うフォーチュン・ハンターに他ならないと断定される (Ann Cvetkovich, 1989)。センセーショナルな場面における情動的効果が、ハートライトの上流階級を昇りつめたいという野心をカモフラージュしているとクビーショビックは指摘する。一方イヴ・セジウィック (Eve Sedgwick) は『男同士の絆』 (*Between Men*, 1985) において、『白衣の女』で

は浪費と荒廃により破滅する貴族階級が描かれていると述べ、パーシヴァルの住むブラックウォーター・パークは貴族社会における家系的な負債の象徴であるとも評された (Stephen Bernstein 1993)。これらの研究を総じてリン・パイケット (Lyn Pykett) は、本作品は結婚詐欺や文書偽造と言った様々な道徳的犯罪を描くことにより不正が蔓延るヴィクトリア朝社会を描き、また男性的なヒロインや女性的なヒーローを登場させることにより因習的なジェンダー観を覆しているが、他方、中産階級の男性主人公が貴族階級の女性と結婚し財産を手に入れる点において既存の階級社会を強化するという相矛盾する側面を孕むと指摘する (2005)。

以上に見るように、本小説の研究は語りの信憑性、ジェンダー観、階級社会の観点からの分析に比重が高くおかれ、イギリス社会の都市空間の変遷という観点からは十分に論じられていない。本作品を読み解く鍵として「修復」というキーワードに着目したい。修復のテーマはイギリスの都市空間の修復、具体的には絵画や木製十二使徒像の物理的修復、また衰退した都市の再建という空間的修復において繰り返し象徴されていると共に、登場人物たちのアイデンティティ (出生や社会的身分) が修復されていくという抽象概念的な意味においても重奏される。経済および産業的發展を遂げる 1850 年代イギリス地方都市において、失われていく者 (物) と修復され生まれ変わる者 (物) との対比が本小説に描かれていることを明らかにしていきたい。

## 1. 絵画の修復とアイデンティティの修復

ローラとマリアンの叔父、フレデリック・フェアリーは、所有する芸術作品の現物を写真に収めて所蔵写真集を作り、傷んだ絵画の修復・復元に情熱を傾けている。そもそも、絵画の家庭教師として雇われたマリッジ館でのハートライトの仕事の一つは、フェアリー氏が私蔵する絵画の中でも、酷い状態に陥るまで放置されてきた貴重な絵画コレクションの「修復と表装 (the business of repairing and mounting)」(15) であった。因みに、この repair という単語は、*All the Year Round* に連載されていた当時は ar-

range となっていたが、のちに校正された。<sup>1</sup> 編集者あるいはコリンズ本人の意図による校正なのかを確認することは出来ないが、私蔵する芸術作品の修復は当時のヴィクトリア朝社会における貴族の間で流行していたものではないかと推測できる。

ハートライトはまた、アンという別の身分を着せられることによって傷ついたローラのアイデンティティを修復するという役割も担っている。実に作品には **identity** という単語が頻繁に登場するが、そのほとんどがローラ、すなわちレディー・グライドに着せられた身分の意味で使われている。アン・キャセリックがローラの替え玉として死亡させられた代わりに、ローラは精神病患者というアンのアイデンティティを背負わされることになった。作品そのものが、夫パーシヴァルとフォスコの陰謀により社会から存在を剥奪されたローラの身分を証明するためにハートライトによって書かれていることから、絵画の物理的修復のテーマとアイデンティティの修復のテーマとが小説において重奏していると言えよう。

ところで、フェアリー氏が所蔵する「酷い状態に陥るまで放置されてきた貴重な絵画コレクション」(15)とは一体、どういうものなのか？音と光に遮られた書齋で様々な芸術品、調度品に囲まれて安楽椅子に腰かけるフェアリー氏は、英国紳士が芸術家、及び芸術作品に対していかに野蛮な態度をとってきたかについて揶揄し、チャールズ五世がティツィアーノの絵筆を拾ったエピソードをハートライトに披露する。そして、商人やブローカーによって勝手に扱われた結果、異臭を放つほどの劣悪な状態にあった絵画の修復を依頼する。ヴィクトリア朝社会において勝手に管理されてきた芸術作品について嘆くフェアリー氏であるが、本作品には他にも同様な扱いを受けてきたものがある。それが、結婚登録簿である。これは同じく放置されてきたパーシヴァルの出生に関する秘密にも繋がる。

パーシヴァルの母はアイルランドでの結婚が破綻後、娘時代の名を使ってノールズベリに移り住み、フェリックス卿と出会い再婚した。しかし、その事を彼は母親が死ぬまで知らなかった。彼の父親は息子のために出来る限りのことをすると約束しながらも、遺書も残さずに死んでしまった。本来なら

遠縁の親戚が手に入れるはずだった屋敷や財産を受け継いだパーシヴァルは、その後金銭問題で負債を抱え、ブラックウォーター・パークを抵当に融資を受けようとしたが、その時必要であったのが出生証明書と両親の結婚登録簿の写しであった。しかし、両親は正式に結婚していなかったため、婚姻を教区に届けていなかった。彼に残された手段は、両親が出会ったとされるノールズベリ教区に保管されている登録簿を見つけ出し、何らかの手を加えることであった。

登録簿の一部を破棄する機会を得るために彼はノールズベリ教区の小さな町であるウェルミンガムに移り住み、教会書記の妻であったキャセリック夫人に近づき、金品を与えながらその見返りに彼女の夫の目を盗んで聖具室の鍵を持ってこさせた。当初のパーシヴァルの計画は、彼の誕生日から逆算した両親の結婚日に相当する1803年7月のページを破り捨てることであったが、9月のところに不自然なスペースを見つけた。それは、ある兄弟二人が同じ日に結婚した登録が右ページへ記載されたため、左ページ下に出来た余ったスペースであった。この“blank space”（544）を見つけた時、彼は計画を大幅に変更し登録簿の破棄でなく、登録簿の改竄、すなわち両親の結婚を証明する記録を加筆することを思いついたのだ。

パーシヴァルが犯した犯罪は彼が非嫡出子であったことが原因であり、両親が残した負の遺産、すなわち両親が正式に婚姻登録をしていなかったことによる社会的な不利益を彼が受け継いでしまったからである。この点において、アン・キャセリックはローラのみならず、パーシヴァルのダブルでもある。アンとパーシヴァルはともに私生児であり、彼らは共に出生に纏わるアイデンティティの空白を埋めるために不幸な結果を招くことになる。アンの場合はアイデンティティの空白は最後まで埋まらず、父親がパーシヴァルであると最後まで信じたままフォスコに殺された。一方パーシヴァルは加筆することにより、私生児であるというアイデンティティを修復し、父の遺産であるブラックウォーター・パークを相続することが可能になったのである。

以上に見てきたように、アイデンティティの修復のテーマは登場人物を介して重奏される。フォスコらの陰謀によって存在を消されアンに代わりてに精

神病院に入院していたローラのアイデンティティを修復することは、言い換えれば「存在の空白 (the blank of her existence)」(443) を埋めることでもあった。具体的にはローラがブラックウォーター・パークを発ち、ロンドンに向かった日付と、アン・キャセリックの死亡診断書の日付との間に矛盾があることを証明し、時間的空白を証拠によって埋めなければならなかった。証拠の決め手となったのは、ロンドンでローラを乗せた御者の帳簿である。一方、パーシヴァルは遺産相続のために自らの出生の記録を結婚登録簿の空白に加筆する。これを可能にしたのには、ずさんに管理された結婚登録簿の存在であるが、それについては3章で述べる。

## 2. 新旧二つのウェルミンガム

ハートライトはアン・キャセリックの出生について話を聞くために彼女の保護者であるクレメンツ夫人と面会をし、そこでキャセリック夫人と旧ウェルミンガムで出会ったことを明かされる。旧ウェルミンガムから2マイルほど離れた場所に、河川への利便性から新しいウェルミンガムの町が誕生した。その結果旧ウェルミンガムには人々が住まなくなり、荒れ果てていった。ハートライトは旧ウェルミンガムを訪れ、年老いた教会書記から話を聞く。

*‘Old Welmingham? There are two places of that name, then, in Hampshire?’*

*‘Well, sir, there used to be in those days—better than three-and-twenty years ago. They built a new town about two miles off, convenient to the river—and Old Welmingham, which was never much more than a village, got in time to be deserted. The new town is the place they call Welmingham, now—but the old parish church is the parish church still. It stands by itself, with the houses pulled down, or gone to ruin all round it. I’ve lived to see sad changes. It was a*

pleasant, pretty place in my time. (475-6)

商業の利便性を求めて新興都市が生まれる一方で、古い町は過疎化し住宅は取り壊されるか朽ち果てる中、教会だけが教区教会として生き延びるといふ数奇な運命を辿る。その結果、教会を監督する教区書記はノールズベリに事務所を構える弁護士が兼ねることになり、教会としての機能は徐々に失われていく。他方、キャセリック夫人に面会するために新ウェルミンガムを訪れたハートライトは、新興した町に独特の陰鬱とした雰囲気の中に、文明による荒廃と現代社会の暗さを感じ取る。

Is there any wilderness of sand in the deserts of Arabia, is there any prospect of desolation among the ruins of Palestine, which can rival the repelling effect on the eye, and the depressing influence on the mind, of an English country town, in the first stage of its existence, and in the transition state of its prosperity? I asked myself that question, as I passed through [sic] the clean desolation, the neat ugliness, the prim torpor of the streets of Welmingham. . . . The deserts of Arabia are innocent of our civilised desolation; the ruins of Palestine are incapable of our modern gloom! (493)

文明による荒廃と現代社会の暗さを象徴する新興住宅地であるウェルミンガムはまた、キャセリック夫人が第二の人生を歩んだ場所でもある。浮気のために夫に逃げられパーシヴァルとの間に隠し子を生んだと噂されても、旧ウェルミンガムに住み続けるキャセリック夫人である。村人たちがより交通の便の良い新しいウェルミンガムに引っ越した時も一緒に住み移り、そこで自分のアイデンティティを修復することに懸命に力を注ぐ。そして、とうとう牧師から挨拶をしてもらうまでに、キャセリック夫人は自分の名誉を回復する。無味乾燥な新興住宅地においてこそ、新しく生まれ変わることが出来たのである。彼女の古いアイデンティティと新しいアイデンティティが新旧

二つのウェルミンガムに象徴されていると言えよう。

### 3. “a lost corner” – 忘れ去られた木製使徒像と登録原簿

パーシヴァルの出生についての鍵を握る両親の結婚登録簿が教会の聖具室にあると確信したハートライトは、旧ウェルミンガムを訪れる。古い町を複製した新興都市の出現により旧ウェルミンガムの建物は壊されるが、教会だけは取り壊されず、教区教会として生き延びていた。聖具室に案内されたハートライトと年老いた教会書記のやり取りにおいて、再び物理的修復のテーマが登場する。

‘Portraits of the twelve apostles in wood—and not a whole nose among ’em. All broken, and worm-eaten, and crumbling to dust at the edges—as brittle as crockery, sir, and as old as the church, if not older.’

‘And why were they going to London? To be repaired?’

‘That’s it, sir. To be repaired; and where they were past repair, to be copied in sound wood. . . . There the things are, as I said before. We have nowhere else to put them—nobody in the new town cares about accommodating *us*—we’re in a lost corner—and this is an untidy vestry—and who’s to help it?—that’s what I want to know.’ (509, emphasis added)

ここでは、長年に渡り荒れ放題の聖具室で放置されてきた木製の十二使徒像はロンドンで修理されるのを待っているが、修理しても駄目なものは複製を作ると教会書記は言う。教会書記が「ロスト・コーナー」と呼ぶ旧ウェルミンガムというマクロな空間は、存在を忘れ去られた教会、荒れ果て放置されてきた聖具庫というミクロな空間へと変化し、その空間で修理を待ち続ける十二使徒像へと視点に移り変わる。この「忘れ去られた場所」である旧ウェ

ルミンガムに、パーシヴァルの忘れ去られたアイデンティティを暴く決定的証拠である結婚登録簿が残っていたことは興味深い。

ところで、修復を待つために保管されていた木製使徒像は当時流行していた教会建築の修復を反映しているとリチャード・アルティック (Richard Altick) は指摘する。ナポレオン戦争後の建築ラッシュでいくつかの地方都市は小ロンドンの様になった。これらの新興都市は鉄道のターミナルや市庁舎、金融街や病院、そして無秩序に広がる工場や倉庫に象徴される。1818年には教会建築法 (“Church Building Act”) が施行され、ロンドン郊外の教会不足の地域や北中部の産業都市において、費用が安価なゴシック様式の教会を建設するために100万ポンドが投じられ、新しい教会の建設ラッシュが始まった。これらのインフラとしての教会整備に伴って流行した教会修復の題材を取り入れた小説家として、アルティックはトマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) を挙げている。教会建築の修復を扱う建築事務所で働いていたハーディーは、古い教会 (城) と新しい教会 (城) との対比を *A Pair of Blue Eyes* (1872-73) や *A Laodicean* (1880-81) において描いた。<sup>2</sup>

ハーディーに先立ち、次から次へと連鎖して起こる事件を結びつける役目として、教会修復のトピックを用いたのがコリンズであったとアルティックは指摘する。旧ウェルミンガムの荒れ果てた教会で起きた火事は、ロンドンで修復されるのを待つ木製十二使徒像が入っていた藁敷の木箱が火元であり、このことが物語を大きく進展させたとしてアルティックは分析するが、テキストには可燃物が他にもたくさんあったことが言及され、木箱が出火原因であるとは限定しにくい。しかし修復を待つ木製使徒像のサブプロットは、アルティックが指摘するように聖具庫の火事とパーシヴァルの死亡という、物語を大きく展開させる事件と連鎖していることから、重要な役割を担っていると見えよう。

教会書記が「ロスト・コーナー」と呼ぶ、経済発展が進むイギリス社会から忘れ去られた古い町と、人々から見捨てられ荒れ果てた教会の聖具室に眠る朽ち果てた使徒像は、華々しいヴィクトリア朝社会の影の部分象徴して

いるといえるであろう。朽ち果てた物で溢れかえる聖具室でずさんに管理され、人々から忘れ去られていたのは使徒像のみならず、結婚登録簿であった。ハートライトは登録簿があまりにずさんな管理に置かれていたことに驚く。

I was struck by the insecurity of the place in which the register was kept. The door of the press was warped and cracked with age ; and the lock was of the smallest and commonest kind. . . . I inquired. 'Surely, a book of such importance as this ought to be protected by a better lock, and kept carefully in an iron safe?' (510)

年老いた教会書記は、先代の教区書記がノールズベリの事務所に原簿の複製を作り、原簿に新しい記入があるたびに転記していたことを明かす。原簿がずさんな管理下に置かれていたのに対して、その複製は教会から5マイル離れた弁護士兼教区書記の事務所で厳重に保管されていた。この複製の存在こそが、パーシヴァルの登録簿改竄の重要な証拠となる。新旧二つの登録簿は新旧二つのウェルミンガムと重なり合い、朽ち果てた登録原簿と荒れ果てた町が呈する様は、フェアリー氏が所蔵する異臭を放つまでに放置された絵画と同様に、ヴィクトリア朝において社会が大きく変化を遂げようとする過程の副産物として象徴されているのである。

## 結 論

以上のように、本作品全体を貫く修復のテーマは、絵画や木製十二使徒像における物理的修復、またそしてヴィクトリア朝における都市の荒廃と再建という空間的修復、また登場人物の出生や社会的身分という抽象概念的修復において幾重にも登場する。年老いた教会書記が「ロスト・コーナー」と呼ぶイギリスの古い町の衰退と、経済的発展による新興都市の出現は、ずさんな管理下に置かれていた結婚登録簿の原本とその複製の関係のようである。

「忘れ去られた場所」はアイデンティティを失った人々の象徴でもあり、キャセリック夫人のように自ら這い上がって社会的身分を修復できた者もいれば、パーシヴァルのように出生を違法に修復した結果、報復を受ける者もいる。またアンのように、誤った出生を信じ、最後まで本当の父親が誰かを知らずに死んでいく者もいる。そして、聖具室の中の木製十二使徒像のように、ボロボロになったまま放置され、修復されずに朽ちていく物もある。一方フェアリー氏が所有する、美術商によって酷い扱いを受けてきた絵画はハートライトにより修復された上、新しく表装され生まれ変わった。このようにして、物質的、空間的修復のモチーフが、登場人物のアイデンティティの修復という抽象観念的な修復のモチーフを根底で支えているのである。1850年代のイギリスが経済および産業的發展を遂げる過渡期において、忘れ去られ失われていく者（物）と修復され生まれ変わるもの者（物）との対比が本小説にはあざやかに描かれている。

\*本稿は、日本英文学会関西支部第12回大会（京都女子大学）において口頭発表した原稿に加筆、修正を加えたものである。

#### 注

<sup>1</sup> Collins, Wilkie. *Explanatory Notes. The Woman in White*. Oxford: Oxford UP, 2008: 671.

<sup>2</sup> アルティックによれば、当時の教会修復は内装外装に使用されている石の表面から醜い装飾を削り取るものであった。ハーディーは *A Pair of Blue Eyes* の1895年版の序文において、このような無差別的な教会修復はやがてイギリスの隅々にまで達したと述べた。(Altick, 359)。

#### 参考文献

Altick, Richard D. *The Presence of the Present—Topics of the Day in the Victorian Novel*. Ohio: Ohio State University Press, 1991: 358-61. Print.

Bernstein, Stephen. "Reading Blackwater Park: Gothicism, Narrative, and Ideology in *The Woman in White*." *Studies in the Novel*. 25.3 (1993): 291-305. *JSTOR*. Web. 22 July. 2016.

Collins, Wilkie. *The Woman in White*. Ed. John Sutherland. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.

- Cvetkovich, Ann. "Ghostlier Determinations: The Economy of Sensation and *The Woman in White*." *Novel: A Forum on Fiction*. 23.1 (1989) : 24-43. *JSTOR* Web. 25 July. 2016.
- Delafield, Catherine. *Women's Diaries as Narrative in the Nineteenth-Century Novel*. Farnham : Ashgate, 2009. Print.
- Duyfhuizen, Bernard. *Narratives of Transmission*. Cranbury : Associated UP, 1992.
- Gaylin, Ann. "The Madwoman Outside the Attic: Eavesdropping and Narrative Agency in *The Woman in White*." *Texas Studies in Literature and Language*. 43.3 (2001) : 303-33. *JSTOR*. Web. 21 July. 2016.
- Hughes, Winifred. *The Maniac in the Cellar: Sensation Novels of the 1860s*. Princeton : Princeton UP, 1980. Print.
- Lonoff, Sue. *Wilkie Collins and His Victorian Readers—A Study in the Rhetoric of Authorship*. New York : AMS Press, 1982. Print.
- MacDonagh, Gwendolyn and Smith, Jonathan. "‘Fill up All the Gaps’: Narrative and Illegitimacy in *The Woman in White*." *The Journal of Narrative Technique*. 26.3 (1996) : 274-91. *JSTOR*. Web. 22 July. 2016. Print.
- Perkins, Pamela and Mary Donaghy. "A Man's Resolution: Narrative Strategies in Wilkie Collins' *The Woman in White*." *Studies in the Novel*. 22.4 (1990) : 392-402. *JSTOR*. Web. 22 July. 2016.
- Pykett, Lyn. *Wilkie Collins*. Oxford : Oxford UP, 2009. Print.
- Sedgwick, Eve. *Between Men*. New York : Columbia UP, 2016 : 161-79. Print.
- Sutherland, John. Introduction. *The Woman in White*. Ed. John Sutherland. Oxford : Oxford UP, 2008. Print.
- Sweet, Matthew. Introduction. *The Woman in White*. Ed. Matthew Sweet. London : Penguin, 2003. Print.